

## 読書を考える —読書活動の支援方法を模索する—

カリキュラム開発専修 伊 東 英

### 1. はじめに

岐阜大学教育学部において実施される岐阜県現職教員に対する12年目研修（＝10年経験者研修）の講師として筆者が研修コースを担当するのは今回で6回目を迎えた。この間、大学研修コースのテーマとして言語教育ないしは読書活動を掲げ、私の担当するコースに参加した研修教員とともに学校における読書活動に関してさまざまな角度から理解を深めるとともに、それぞれの研修テーマに副って適切なアドバイスを提示できるよう努めてきた。参加する研修教員が複数の校種に分かれる場合には、対応が難しい場面もあったが、今回の参加者は高等学校の教諭が2名であり、それぞれの勤務校は県内では中堅に位置する高校であるという点においても共通する問題点がみられ、短期間ではあったが充実した研修内容を消化できたと思われる。

学校における読書環境の整備は社会的な支援によるところが大きい。子どもの読書をめぐって過去10年を振り返ると、2000年に国立国会図書館の支部図書館として国際子ども図書館（東京都台東区上野公園内）が設立され、2002年5月5日に全面開館した。2001年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定され、これを受けて2002年8月に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が閣議決定された。さらに2008年3月には「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（第二次）」が新たに策定され、国はそれまで以上に読書活動の強化に力を入れようとしている。また、2003年度から「学校図書館法」の改正により12学級以上を有する学校には学校図書館司書教諭が配置されることになった。一方、広く国民全体に対しては、2005年7月に「文字・活字文化振興法」が公布・施行され、文字・活字文化の振興によって知的で心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現を目標とすることが国や地方公共団体の責務であるとされた。文部科学省は2003年に「子どもの読書活動推進ホームページ」<sup>1</sup>を開設し、取組の実例紹介や関連データ等さまざまな情報提供を行ってきている。

こうした流れの中で、学校における読書活動ないしは読書指導はこれまで以上にその重要性を増してきている。いわゆる「朝の読書」活動は、全国的に小学校から高等学校まで校種を問わず広範に実施されている。岐阜県の状況は表1<sup>2</sup>の通りであり、「朝の読書」実施率は全体として全国平均を上回っているが、中学校での実施率は全国平均を12ポイント下回り、逆に高校では14ポイント上回っていることが特徴的である。ただし、昨年の同時期のデータ<sup>3</sup>と比較すると岐阜

1 子どもの読書活動推進ホームページの URL ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/dokusyo/youkoso/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/youkoso/index.htm))

2 この表は、朝の読書推進協議会調べ「朝の読書」全国都道府県別実施校数一覧」ならびに「朝の読書」全国都道府県別実施率」（平成21年2月20日現在）から、岐阜県のデータを抜き出して作成した。朝の読書推進協議会 URL ([http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp\\_0032.html](http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp_0032.html)) 参照。

3 拙稿「読書を考える—教師自らが良き読書人となるために—」，教師教育研究4，岐阜大学教育学部，2008，p. 237参照。

県の小学校、中学校は実施校数も実施率も高くなっているが、高校では実施校数も実施率も下がっていることが気にかかる。

岐阜県の朝の読書実施校数			
全体	小学校	中学校	高校
481	318	121	42
岐阜県の朝の読書実施率, ( ) は全国			
73% (69%)	83% (73%)	61% (73%)	53% (39%)

表1 岐阜県の朝の読書実施状況

全国学校図書館協議会（SLA）が毎日新聞社と共同で毎年実施している「学校読書調査」は2008年度で第54回となり、その調査報告によると、2008年5月1か月間に読んだ平均読書冊数が小学生で11.4冊、中学生で3.9冊となり、どちらも過去最高の記録となった。それに対し、高校生は1.5冊で2005年以降ほとんど変化がない。また、5月1か月間に1冊も本を読まなかった不読者の割合が、小学生で5.0%、中学生で14.7%、高校生で51.5%となっており、小・中・高すべての校種で増加に転じ、特に高校生では前回調査に比べて3.6ポイント増えていることが目立っている。詳細な説明は省かざるをえないが、高校生の読書離れが再び進行しないよう、高校における読書活動や読書指導は十分に行われる必要がある。

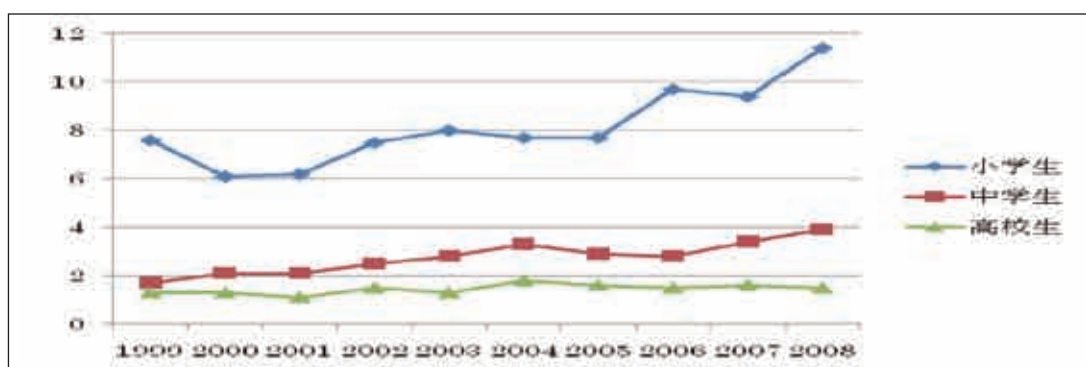


図1 過去10年の5月1か月間の平均読書冊数の推移<sup>4</sup>

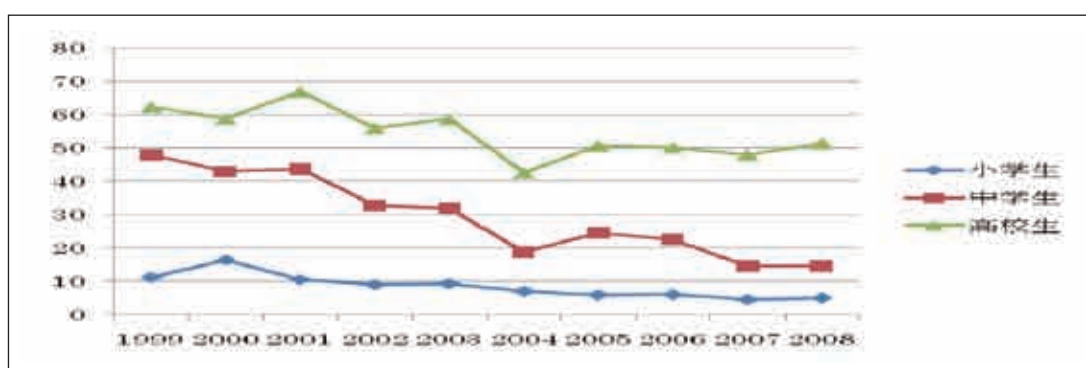


図2 過去10年の不読者 (%) の推移<sup>5</sup>

4 全国 SLA 研究会・調査部，第54回学校読書調査報告，学校図書館2008年11月号，p. 13の図1-1を過去10年分だけ抽出して作成。

5 同前，p. 14の図1-3を過去10年分だけ抽出して作成。

## 2. 大学研修内容

12年目研修の大学研修は5日間の期間が設定されており、その第1日目と第5日目は研修を大学で行い、その間の3日分は研修教員が職場を中心にして自己研修を実施する計画になっている。研修第1日目には、この研修コース全体にかかわる説明や参加者の研修課題の紹介と問題点の整理を中心に議論を進め、これに続く自己研修3日間に研修教員各自が確実に研修を行えるよう環境を整えた。また自己研修については、そのつど本学のLMSであるAIMS-Gifuの掲示板機能を利用して研修内容の報告を行うとともに、研修教員と大学教員が相互に連絡を取ることができるように配慮した。これによって、個別の研修ではあっても、その方向性を見失うことなく学習を進めることができたというコメントを最後にはもらっているため、研修の途中経過を報告しながら自己研修を進めていくのは効果的であったと思われる。最後の研修第5日目には、研修教員は自己研修の成果に基づいたレポートの提出と、その内容をプレゼンテーション形式で発表し、全員でディスカッションを行い、研修内容の確認を行った。

研修コースの構築にかかわる方法論的特徴は次のようにまとめることができる。

- ① 研修教員個々の研修課題に副った研修をサポートできるように配慮する。
- ② 研修第1日目で研修教員が抱える問題点を整理し、自己研修を進めやすくするよう適切な議論を行う。
- ③ 自己研修期間中はAIMS-Gifuを用いて研修日毎に報告を求め、大学教員がコメントを返すことで、研修教員と大学教員の協働的研修スタイルを貫く。
- ④ 研修第5日目は研修の総括としてプレゼンテーション形式の発表を行い、研修教員の勤務校で授業再開時に研修成果に基づいた実践ができるように研修の総括を行う。

大学研修の具体的な流れは次のようなものであった。

### 1) 大学研修第1日目(2008年7月30日)

#### ・教室：

AIMS-Gifuの利用のために実際にPCを用いて掲示板への書き込み練習をするために、教室はA214遠隔スタジオを使用した。ここでは大きなモニターを見ながら説明ができるので、研修中のAIMS-Gifu利用も問題なく行うことができた。

#### ・自己紹介：

本年度の参加者は2名で、ともに高等学校の教員であるA教諭(国語)とB教諭(英語)で、ふたりとも勤務校における読書活動の推進に関して研修を行った。

#### ・研修課題：

A教諭は「生徒の豊かな読書活動のあり方・支援の仕方を研修する」、B教諭は「朝読書の効果的なすすめ方の研究」であった。A教諭は国語の時間を含めて、どのような読書指導が効果的に生徒の読書への意欲を高めるのかについて研究し、またB教諭は勤務校で実践されている朝読書の活動の原点から振り返り、現状の分析と今後の対策に関して研究を行った。

#### ・読書をめぐって：

本コースの全体テーマである「読書を考える」ために、事前に課題図書として指定した『読書力』(齋藤 孝, 岩波新書)を基に意見交換を行った。同書は主に大学生向けに書かれて

いるが、研修教員にとっても自分の読書を見直す契機を与えてくれる内容を含み、また高校生への指導にも役立つものである。

昼休みを挟んで、午後の展開は次の通りであった。

・大学図書館の利用：

本学の図書館は必ずしも文系図書が充実しているわけではないが、研修教員は内地留学生の扱いで大学図書館を利用できるので、図書の閲覧と、自己研修に必要な図書がある場合には貸出手続きをとるよう指示した。

・AIMS-Gifu 掲示板の練習：

ノート PC を用意し、研修教員がその場で AIMS-Gifu の機能を試すことができるようにした。掲示板の練習として相互にメッセージを交換し、以後の利用のための準備を行った。

・研修教員の課題と自己研修：

午前中に発表した各自の研修課題に関して、相互に意見交換を行い理解を深めるとともに、研修方法について具体的なアドバイスを行った。自己研修の成果は研修第5日目に20分程度のプレゼンテーションとして報告することを指示。これは研修成果の報告とともに、発表技術の向上も併せて意図したもので、例年プレゼンテーションなど行ったことがないという研修教員も、最終的には良い経験になったとプラスの評価をしてくれている。

## 2) 大学研修第5日目 (2008年8月27日)

・教室：

第1日目と同様に、教室はA214遠隔スタジオを使用した。モニター画面にAIMS-Gifuを表示し、自己研修中の掲示板のやりとりや、提出されたレポートを見ながら説明や議論ができるので、少人数での研修には便利であった。

・プレゼンテーション：

研修成果を書かれたレポートの他に、口頭発表として20分程度のプレゼンテーションにまとめてもらった。プレゼンテーションの資料作りのために、自己研修中に適当な写真を撮影しておくように指示してあったので、提供された写真によって、教室内の読書コーナーの設置や本の掲示板の様子等が具体的な作業内容がよく把握できた。

また、読書指導の一方法であるブックトークを指導案として作成した研修教員には、そのブックトークの実演も行ってもらい、印象に残った。

・学校現場での実践に向けて：

午後には、午前中の研修成果の発表を踏まえて、研修教員それぞれの学校現場での実践に今回の研修をどのように活かしていくことが可能であるかを、研修コース全体の総括として全員で討議した。

## 3. 研修教員の学び

今年度の研修教員は高校教諭の2名であり、それぞれが勤務する学校の実態はほぼ似通った状況であったため、問題意識も共有できたと思われる。上述の通り、「学校読書調査」によると高校生の読書状況はかなり深刻であり、なかなか改善の兆しが見えてきていないようである。研修教員が行った勤務校での調査では、全国平均を若干下回る読書状況であることが分かった。



こうした現状を改善するために、研修教員は勤務校の朝読書への取り組みを見直し、さらにさまざまな工夫を凝らした読書活動への展開を模索した。生徒の実態把握、学校の現状認識、限られた条件での改善の工夫、こうした着実な方法で読書指導の支援方法を熱心に考察した姿勢は高く評価できるものであった。

以下に研修教員が研修第1日目と第5日目終了後に寄せたコメントから引用することで、彼らの学びの実態報告としたい。

〈研修第1日目を終えて〉

- ・昨日の研修では、「生徒の読書活動」という1つのテーマで、絡み合って、もしくは、漠然と抱える複数の問題を、明確（とまではいきませんが…）に言語化し、その問題がどのような関係にあり、それに対応するにはどういうことを検討、研究するべきかが、見えてきました。今回の研修テーマとしての研修、研究活動の充実もさることながら、そのような問題の分類と体系的、階層的整理、分析、検討といった手順の大切さ、意義を再認識できたのも、私には大きな成果だったと思います。
- ・昨日の研修は私にとっても本当に充足感が得られる研修になりました。研究テーマを設定はしたものの、どのようにこの研究をすすめていったらよいのか全く案が浮かばず、とても不安に感じておりました。それが、先生との話の中でどんどん道がひらかれていき、爽快感さえ感じられました。発表時にパワーポイントを使うことに未だ不安を感じてはおりますが、勉強できるいい機会を与えていただいたと思っています。こういう状況にならなければ、なかなか勉強できないですから。

〈研修第5日目を終えて〉

- ・テーマはあるもののその分析も十分でなく、具体的にどういう切り口で、どのようなことを、どのようにすすめたらよいか漠然としたまま迎えた初日から、無事、その方向性がみえ、全体をイメージしながら具体的な活動（研究・実践）をし、そして、昨日最終報告をすることができ、嬉しく思っています。
- ・朝読書について考えたいという漠然とした気持ちから始まった今回の研修でしたが、本校の朝読の原点にもどって研究できたことはとても有意義であったと思います。読み聞かせは生徒がどう受け止めるのか予想できませんが、頑張りたいと思います。

#### 4. おわりに

12年目研修で読書活動を研修講座のテーマとして掲げてきて、毎年少人数ではあるが、コース参加者たちとは協働して確実にこのコースを作り上げてきた。またコース参加者の中には、その後の読書活動の実践報告を発表してくれる人たちもいることが、今後の学校現場における読書活動の発展につながる期待をもたせてくれる。

そもそも読書活動は、なかなかその効果が見えてこないものであるだけに、粘り強く生徒を読書に向かわせる努力を怠らないようにしなくてはならない。今年度の研修教員はそれぞれ、勤務校における生徒の実態を考慮に入れて、読書の支援方法や朝読書の効果的実践のための方策を研究した。これらの研修成果が今後の活動実践において、大いに活用されることを願っている。